

### ポピュリズムの輪郭を考える：人民・代表・ポピュリスト

UKAI, Takefumi / 鵜飼, 健史

---

(出版者 / Publisher)

法学志林協会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Review of law and political sciences / 法学志林

(巻 / Volume)

110

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

83

(終了ページ / End Page)

107

(発行年 / Year)

2012-11

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008480>

# ポピュリズムの輪郭を考える

——人民・代表・ポピュリスト——

鶴 飼 健 史

## 1 はじめに——ポピュリズムの問題

現在、ポピュリズムはすでに人文・社会科学の基礎的な概念のひとつとして登録されている。一九六〇年代の萌芽的な研究では、特定地域を対象とした地域研究・比較政治学上の特異な事例として語られていたポピュリズムは、もはや現代社会一般を議論するために欠かすことのできない現象を表現するようになった。ただし、ポピュリズム現象およびそれと並行した研究の拡大は、この概念のインフレーションを招く結果をもたらしている。その研究がしばしば枕詞として用いるように、ポピュリズム概念は内容上の一貫性が欠けており、使用状況に応じてさまざまな対象を意味するようになってきた (Taggart 2000, Panizza 2005)。たしかに、こうした研究状況を悲観しつつ、それでも抽出可能なポピュリズムの共通要素を論じるという研究の方向性は重要である。しかし、本論考ではポピュリズムのとらえがたさを、研究上の障壁というよりも、むしろこの概念の特質として理解したい。本論考はポピュリズムの輪

郭に注目しながら、この概念的な混乱の一因を考察することになる。

本論考の課題は、こうした用語の混乱の中で、どこから、いつからポピュリズムはポピュリズムなのかという問題を考えることにある。言い換えるならば、人民とポピュリストの言説的なつながりの輪郭をどのように設定し、論じることができているかを検討する。こうした原理的な考察は、「ポピュリズムはほんとうに民意の反映なのか」という実践的な問いに対する、理論的な立場からの回答をもたらすと期待される。

一般的に、ポピュリズムは「人民の意志」（民意）を政治的に実現しようとする運動およびその観念として理解されている。より理論的な表現を用いれば、人民主権原理を可視化するものとしてポピュリズムを認識することができると。ただし、実際にはこの定義が価値中立的な立場を維持できるわけではない。誰が人民なのか、民意をどのように解釈するのか、民意と政策的な実効性は調和しているのか、新たな排除を生まないか、あるいはポピュリストのパフォーマンスに騙されてはいないか等の無数の疑問がこの定義を取り巻いている。つまり、解釈をめぐる恣意性をポピュリズムから切り離すことができず、そのかぎりにおいて否定的な含意を有するとみなされている。こうした固有の複雑さを内包したポピュリズム概念を分析するために、本論考はアクターに注目しながら上述した定義を、「人民」を「ポピュリスト」が「代表」する形式と言い換えることにしたい。そして以下の各節では、主にエルネスト・ラウラのポピュリズム理論との対話を重ねながら、これら三つの要素をそれぞれ考えることで、ポピュリズムの輪郭がもつ特徴を探究する。

ポピュリズムの輪郭の考察が有する射程を明らかにするために、その研究上の論点を三つ言及したい。第一に、この分析課題は、民意の忠実な反映を自称するポピュリズムに対して向けられる、民意の歪曲という批判にはどのような意味で妥当性があるといえるのかを明確にする。この点を考察する上で、次節で論じられるポピュリズムにおける

人民の存在論の深化が必要となる。この文脈における人民とは誰なのか、そして彼らはどのような機能を果たしている、あるいは果たすと期待されているかが注目されなければならない。その上で、民意の歪曲という批判を生じさせるような、ポピュリズムと「正しい民主主義」との理論的な関係が考察される必要がある。ポピュリズムは民主主義からの逸脱であるというそれを批判する立場が共有する一般的な理解に対して、ラクラウやマーガレット・カノヴァンを代表とする政治理論研究では、むしろ両者のつながりに着目してきた<sup>(1)</sup>。他方で、現代ヨーロッパ社会におけるポピュリズムの興隆を横目で見ながら、両者の対立を強調する議論も根強く残っている (e.g. Abts and Rummenens 2007)<sup>(2)</sup>。本論考では、民主主義とポピュリズムをめぐる古典的な論点の解決にはまったく手が及ばないもの、<sup>(3)</sup>ここで取り上げられる民意についての理解を深めたいと考えている。

第二に、本論考は現代政治理論・社会理論の成果が、どのような形で日本の政治・社会の文脈に適應できるかに強い関心をもっている。少なくとも英語圏のこれまでのポピュリズム研究において、現代日本社会が分析対象となることはなかった。さらにポピュリズムの理論研究が念頭に置いている地域はあくまでヨーロッパであり、一部のアメリカ大陸への注目を除くと、アジア等の事例は看過されている。理論研究に議論を限定するならば、それが培ってきた理論的枠組みを現代日本社会の分析にそのまま適用できるかについては留保せざるをえない。たとえば、理論研究のほとんどはナショナルな単位でのポピュリズムを暗黙に想定しているが、地方政治におけるポピュリズムの台頭というアジアや北米で散見される文脈とは政治的な単位がずれているのはあきらかである。この点は、ナショナルなもの契機が (たとえポピュリスト的政治家個人の志向がその強化と合致していたとしても) ポピュリズムの中で相対的に薄いという特質に反映されている。この特徴には、日本型ポピュリズムに排外主義的な契機が相対的に弱く、敵対性の主要な対象として政治家や役人が措定されている点を加えることができるだろう。国政の政党政治におけるポピ

ユリズム分析を主要な対象としてきた既存の理論研究の蓄積が、どのように地方政治の首長レベルでの分析に貢献することができるか。本論考はポピュリズムの輪郭に注目することで、理論研究の適用可能性についての展望を示したい。

そして第三に、本論考はポピュリズムをわざわざ概念として論じる意義について明らかにするだろう。ポピュリズムという言葉によって現代社会を形容する必要性はまったく揺らいではない。ただし、ポピュリズムの内容を確定できないにもかかわらずこの言葉を使用しなければならぬ現状は、何らかの隠れた基準とそれへの合意が存在していることを疑わせる。本論考は、こうした共通理解を部分的に明らかにしながら、ポピュリズムを語ることでそれ自体がもつ意味を問題にする。たとえば、ポピュリストは有名な政治家や人気のある政治家などとは区別されているはずである。本論考は、まさにポピュリズムを口にする瞬間に現出するその輪郭が、こうした判断を密かに提供し、この概念の無限の拡張を抑制していると考えている。ポピュリズムの輪郭を考察する課題は、こうした無自覚的な基準のあり方を説明することになるだろう。

## 2 ポピュリズムとナショナルリズム——あるいは人民と国民

これまでポピュリズムの理論研究の多くは、世界中に散らばるポピュリズムの雑多な主張と様式の中に、主権者としての「人民」のアイデンティティの構築を共通点とする事実を掘り起こしてきた (Laclau 1977: 165, e.g. Canovan 1982, 2005)。ポピュリズムの輪郭を画定するためには、それが想定する人民のあり方を考察する課題は避けることができない。本節は、ポピュリズム分析の切り口として、人民の言説的な構成とその境界を考える。とりわけ本節で

は、しばしばポピュリズムと類縁的に論じられてきたナショナリズムとの関係に光をあてたい。ある特定の集団を同質的な価値の下に同一化しようとするナショナリズムの傾向と対比して、ポピュリズムはどのような特徴を有しているだろうか。

一般的に、現代ポピュリズムの多くは、前世紀後半から顕著となったナショナリズムの興隆と同心円状に展開されているとみなされている。そして、実際にヨーロッパでは、ポピュリストと呼ばれる一連の政治的指導者の多くはナショナリズムを喚起する言説を多用し、その空間を同質的なものとして再定義しようとしてきた。この場合、ポピュリズムにおける人民はそのまま国民と互換可能な存在として理解することができる。つまり、ポピュリズムの輪郭は、実質的にナショナルな単位とまったく同じ軌条をなせることになる。このようなポピュリズムをナショナリズムに直接的に引き付けて解釈する常識的な傾向に対して、根本的な修正を迫るのがラクラウのポピュリズム論である。以下では、『ポピュリズムの理性について』(Laclau 2005a)で展開された彼の議論を中心に読解しながら、ポピュリズムとナショナリズムの分岐点を明らかにしたい。

ラクラウの問題意識は、彼の表現を用いれば、ポピュリズムを形式主義的に提起することであり、その存在ではなく、あくまで存在論的分析の対象として考察することである。

ポピュリズムを定義しようとするほとんどの試みは、特殊な存在的内容において何がそれに特有であるかを提起してきた。その結果、それらは、大量の例外ですぐに溢れてしまう経験的な内容を選択するか、あるいはいかなる概念的な内容にも翻訳できないような「直観」にうったえるかという、先の見えた二者択一の二つの帰結をもたらす自滅的な行為におわってしまった(Laclau 2005b: 44)。

ポピュリズムの輪郭を考える(鶴岡)

ラクラウのポピュリズム論のもっとも顕著な特質は、ポピュリズムを人民としてのアイデンティティ構築の「政治的な論理」(Laclau 2005a: 117)として認識し、この主体化の論理を新しい普遍性の生成として理論化する点にある。ラクラウにとってポピュリズムは、特定の内容や様式や到達目標を有しているような主張や運動ではない。むしろ、それは社会に拡散しているさまざまな要求を等価的に結びつけ、それによって集合的な主体である人民を構築する過程である。この過程において、ポピュリズムの最小単位となる社会的な要求は、他者から人民を線引きする特定のイデオロギー的形式へとそれぞれ等価的に節合される (Laclau 2005a: 134)。その際、人民のアイデンティティは固有の意味を有しておらず、それはヘゲモニー闘争の暫定的な冊結としてのみ提供され、社会を二つの集団に分ける内的なフロンティアを構成する。つまり、内的なフロンティアの形成による社会空間の二分化および要求の等価的な連鎖は、「ポピュリスムのな切断」が出現するための条件の両面を意味している (Laclau 2005b: 38)。ポピュリズムのな切断において、主体化の中心が欠如しており、ラクラウはそれを特定の意味内容をもたない指示記号という意味で「空虚なシニフィアン」と呼ぶ。空虚なシニフィアンは、それを埋めようとする政治的な行為の対象となるような、しかしながらけして特定の何かによって埋まることのない記号である。<sup>(1)</sup>ポピュリズムは、さまざまな特殊な要求の等価的な節合を可能にする空虚なシニフィアンを欠くことができない。これはポピュリズムの概念的な本質の欠如の根拠であるとともに、後述するように、ポピュリスト的政治家が理論的に措定される位置である。

ラクラウが理論化したポピュリズムの論理は、人民のアイデンティティがあくまで特殊な要求の節合によって構築され、その節合が連鎖するかぎりにおいて普遍的であるとみなす。彼が「ポピュリスムの理性」と呼ぶのは、特殊性から普遍性を構築するポピュリズムの論理のことである (Laclau 2005a: 224-6)。ラクラウにとって、普遍性と特殊

性は対立するのではなく、相互に存在様式を規定している。

普遍的なものは特殊性たちの等価的な関係にはかならない。そして空虚な場——それは空虚さの次元とよばれるべきだが——は、まさにすべての特殊性の内的な分離の掃蕩である(…) (Lacian 2004: 283)。

シニフィアンの中身をめぐるヘゲモニー闘争を通じた、特殊なアイデンティティをつなげる等価性の連鎖の次元として、普遍性が存在している (Torging 1999: 175-6)。そしてこの意味における普遍的なものひとつである人民は、いかなる最終的な定義を拒絶する。この人民の決定不可能性が、特殊性との関係において、人民をひきつづき普遍的なものでありつづけることを保障しているのである。

ポピュリズムにおける人民の再帰的な構成は、人民のなんらかの隠された本質を実現させる目的によって主導されるような人民の疎外論とは、一線を画している。人民は特殊な要求からなるヘテロ的な構成物であり、特定の本質や同質性に還元されることを拒絶する。ラクラウは、このポピュリズム的なシニフィアンのあいまいさを「浮遊するシニフィアン」と呼ぶ。それは人民の輪郭を固定する内的なフロンティアを固定化できないことを表現している (Lacian 2005a: 193, 193)。もちろん、構築される人民が、それぞれ固有の意味と文脈を有する特殊性を含むかぎり、あらゆる種の傾向性をもっている——あちらのポピュリズムはこちらのポピュリズムとは内容上の相違があるはずである。ラクラウのポピュリズム論が主張するのは、固有の本質をもたない人民には確定した輪郭がなく、新たなフロンティアが線引きされ直す可能性に開かれているという点である。

それでは、特定の外形を有しない人民とナショナルなものの契機はどのような関係にあるといえるのだろうか。ま



さに内的なフロンティアとは、国民でない者との対比によって語られる国民としての同質性を事実上示しているのではないだろうか。あるいはポール・タッグートの表現を用いれば、ポピュリズムが唯一の目的とする「ハートランド」の実現は、結局はナショナルなものの単位の再定義をめざす行為なのではないだろうか (Taggart 2000)。こうした疑問は当然生じてくるだろう。これら疑問に答えるためにも、ポピュリズムを区切るフロンティアを意識しながら、社会的な敵対性をさらに明らかにする必要がある。社会的な敵対性はくりかえし敵を示すことで、フロンティアの内側にある集合的なアイデンティティを形成しながら、同時にその完成を阻止している (Torfing 1999: 128-31)。ラッセ・トマセンによれば、敵対性は、さまざまな差異の統合をうながして意味がつくられるのを可能にするともに、それらの元来の意味を破壊しながら客観性が成立することを不可能にする (Thomassen 2005: 297)。そして敵対性から生じるこうした言説的な「脱臼」は、節合過程の意味的な可動域を決定し、実質的な制限を定義しているということが出来る。つまり、個別の敵対性には特有の社会的な背景があり、それが人民の構成と結びついているかぎり——制度的な限界とは別の次元で——人民も特有の形式を帯びざるをえない。

問題は、この敵対性における規定をポピュリズムにおける確定した輪郭と同一視できるかどうか。あるいは、さらに踏み込むならば、ナショナリズムをその輪郭として適用する妥当性を認めるかどうかにある。この問題に対するクラウ理論の立場は否定的なものである。まず明らかな点は、たとえ敵対性がポピュリズムの自身を自己制限的に提供していたとしても、少なくとも内的なフロンティアは閉じた領域によって代替できるものではない。なぜなら、それは空虚なシニフィアンの終わりのなき節合において修正を加えながら引かれつづけており、ある特定の同質的な領域を切り抜くことに成功していないからである。そして敵対性は、トマセンによれば、「言説的な効果としてのみ、あるいは、決して到達することのない連続体のひとつの目的としてのみ存在する」(Thomassen 2005: 296)。内的フロ

ンティア（連続体）には安住できる境界線はなく、それを否定しつづけることで存在している。

ポピュリズムはあくまで人民の主体化を目的とし、人民自体の定義はヘゲモニー闘争の結果に準じている。そして、ポピュリズムの論理においては、国民とそれ以外を区別する敵対性は特殊な要求のひとつである——それが人民とどのようにつながるかにはヘゲモニー闘争に依存する。そのため、ポピュリズムとナショナリズムはまさに普遍性と特殊性の相互構成的な関係性にある。ヤニス・スタヴラキスによれば、たしかにポピュリズムの次元はナショナリズムとしばしば接続するものの、双方は節合の関係であって、本質的な融合の関係ではない。人民と国民の敵対性が異なっており、ポピュリズムの論理においては、国民は人民がもちうるシニフィエのひとつにすぎない (Savvakakis 2005: 245-6)。ラクラウも、ポピュリズムのフロンティアを特定の境界線で区切ろうとする理論が、ポピュリズムから逸脱してゆくことを認めている。政治主体の同質化をひとつの目的とした「民族的ポピュリズム」においては、敵対性の他者は共同体の外的なものとされており、人民を構成するシニフィアンの空虚さはそもそも制限されている (Laclau 2005a: 196)<sup>(6)</sup>。つまり、ポピュリズムの論理における特殊なもの多多元性およびその等価的な連鎖が、ある特定の同質性によって否定されることになる。彼の言葉をかりれば、

よりグローバルなアイデンティティへの数多くの要求が、内容において「普遍的」であり、多様なエスニック・アイデンティティをまたぐような方法で、「人民」を構成することは完全に可能である (Laclau 2005a: 198)。

ラクラウの観点からすれば、最終的には何らかの一元的な同質化を目指すポピュリズムの分派は、いずれポピュリス

ムの看板を外さなければならなくなるだろう。<sup>(6)</sup>

ラクラウのポピュリズム理論では、ポピュリズムは人民を構築しそれに意味を与える形式である。そして、その人民は政治的な闘争を陶冶する空虚なシニフィアンであり、普遍的なものとして存在する。こうして、ヘテロ的な人民が同質的な国民などの主体と区別されるとともに、政治そのものの意味がポピュリズムと同義的に語られるようになる。彼によれば、問題は、ポピュリズムであるかどうかではなく、どの程度ポピュリズム的であるかである (Laclau 2005b: 45-6)。次節以降では、こうしたポピュリズムの収縮しつづけるフロンティアに対して、ラクラウに対する批判的な視座を組み込みながら、どのような制限が可能であるかについて理論内在的に考察したい。

### 3 「代表」とポピュリズム

本論考の冒頭で示したポピュリズムの理解にあらためて言及するならば、人民とポピュリストとを接続する「代表」という契機が本節の議論の中心となる。輪郭が未確定である人民をポピュリストは代表できるのだろうか。この問題を考察するために、まず本節で代表についての理解を深めたい。本節では、近年政治理論分野で顕著に研究の蓄積が進んでいる代表論の成果を参照しながら、それをポピュリズム分析に適用させてみたい。またラクラウは代表概念に注目することでこの点にも多大な貢献を果たしているが、本論考はその「特殊性」に目を向けることにする。

ラクラウの定義によれば、代表とは「ある者が物理的には不在である場に存在するという擬制」(Laclau 1996: 97, e.g. Ankersmit 2002: 109) である。現代政治理論は、不在の存在というこの本質的に矛盾する機能の現われとして代表を論じている。現代政治理論が考える代表は、複数の要求を集約するような制度というよりも、原理と制度を結

びつける言説的な枠組みである。ナディア・ウルビナーティによれば、政治的代表は、選挙的・形式的な代表（代表制）と仮想的・イデオロギー的な代表（代表性）という二つの形式の「動的な総合」である（Urbina 2006: 39）。このような視座にしたがえば、現代の代表制民主主義の問題点は、私たち主権者の代表性が、既存の代表制によって調達できないことが常態化していると表現できる。こうした代表をめぐる危機がポピュリズムの温床となってきた点は、経験的にも理論的にも指摘されてきた（Taggart 2000, 大嶽 2003, Panizza 2005, 吉田 2011）。

現代政治理論において、代表する者と代表される者はともに代表によって構成される。つまり、代表は、代表される者が一方的に吸収されたり、代表する者が意志や利益を忠実に反映したりするような受動的な過程ではない。代表する者はもちろん、代表される者もまた自然に存在しているのではなく、あくまで代表という関係性の中でつくられる（Ankersmit 2002: 115, Vieira et al. 2008: 143）。代表制民主主義という原理から離れて、代表する者と代表される者がアプリアリに存在しているわけではないのである。このような政治的な概念としての代表制民主主義の成立は、ラクラウが指摘するように、政治主体が代表過程から逃れられなくなり、「いかに代表されているか」が政治闘争の中心的な問題となることを意味している（Laclau 1996: 99）。

アン・フィリップスは、「何を代表するか」にもとづいた「観念の政治」に対して、「誰を代表するか」を対象とした「現われの政治」を、排除に抵抗してより公正な代表を実現する構想として提起する（Phillips 1995: 5）。「現われの政治」がもとめるのは、平等な政治参加の実現のみならず、それを発展させた実効的な代表の形式である。トマセンによれば、主体を構成する持続的な過程である代表を超えることは、不可能であるし、その必要もない。何かつくりだす行為遂行性と何かを代替する引用性というふたつの対立する性質を代表が内包しており、そのため代表はこれらに規定された決定不可能性を特長としている（Thomassen 2007: 117）。

代表が政治の実質的な議論の中心として受け入れられてきた事実を背景として、ナンシー・フレイザーは、代表性を正義論のひとつとして積極的に組み込むことを模索している。彼女によれば、これまで世界の様式を規定してきたケインズ主義―ウェストフアリア体制の枠組みでは、正義は経済的な分配と文化的な承認を中心的な課題としてきた。しかし今日では、その枠組み自体の自明性を問うという新たな正義論の形式、つまり誰がそうした分配や承認に与かれるかという政治的な代表についての問題が加わった (Fraser 2009: 15)。「社会的帰属の基準を設定し、そして誰が成員として計算されるかを決定することで、正義の政治的次元は別の次元の範囲を特定する。それは、誰が包摂されているのか、誰が排除されているのか、正当な分配と相互的な承認の資格を有する者の集団を示す」(Fraser 2009: 17)。この正義の次元を受け入れた場合、代表の失敗として認識される反正義は二つのレベルにおいて表出することになる。第一に、代表の枠組み内部において生じる、手続的あるいは制度的な失敗である(代表制のレベル)。これに対してより重要なのは、第二に、政治についての境界設定そのものにおいて、ある人びとが排除されるような代表の失敗である(代表性のレベル)。後者の問題は、既存の政治・社会体制の枠組みが揺らぐことで表面化してきた。彼女も指摘するように、この代表の失敗に対処し既存の正義を実効的なものとするためには、そのための制度を「どのようにして」設定するかというメタ政治的な正義への参加および「代表」が重要になる——それは、もちろん、メタ政治の次元で別の新たな代表の失敗を生じさせないような「代表」である (Fraser 2009: 25-7)。

現代政治理論における代表論を小括したい。いまや代表は、何らかの本質を反映する行為としてではなく、対象と対象との言説的なつながりを表現し、これら対象に意味を与える関係性として理解されるようになってきた。そして、それはまさしく政治の場として強調されるようになってきた。そのかぎりにおいて、代表は、たんなる手続的な妥当性に回収されることのない、「主権者を持続的に機能させつつづける能力」を有している (Urbani 2006: 5)。

代表論における人民主権原理の代表性への着目が示すように、「人民」の実現を目的としたポピュリズムもまた代表の契機を有している。これまでの議論に従うならば、「人民をポピュリストが代表する」という関係は、「代表性の次元にある問題である。人民はそれとして代表されるかぎりにおいて存在すると同時に、ポピュリストは代表するかぎりにおいて存在する。そして、ポピュリズム的な代表関係において、ポピュリストが人民を代表できるか否かは問題としては生じない。この代表関係において「いかに代表されているか」がポピュリズムについての評価の焦点となるのである。

ラクラウの代表概念をふたたび参照しながら、ポピュリズムにおける代表のあり方を議論するとともに、次節へと引き継がれる課題について言及したい。彼の代表概念は二重の過程を含んでいる。ひとつは、代表される者が代表する者を選出する過程であり、もうひとつは、代表する者が代表されるべき意志を形成することで、代表される者のアイデンティティを構成するという過程である (Laclau 2005a: 158)。彼がより重要視するのは後者——代表のメカニズムによって人民を構成する事例——である (Laclau 2005b: 48)。ポピュリズムの論理では、空虚なシニフィアンが、さまざまな政治的要求の等価的な連帯を代表するかぎり、アイデンティティ形成の中心点として機能している。この代表の論理は、個別的要求の実現を図る(代表される者からする者へ)と同時に、全体性を構成する(代表する者からされる者へ) (Laclau 2005a: 161-2)。つまり、彼の独特な表現によれば、いかなるポピュリズム的なアイデンティティも本質的に代表的な内部構造を有している (Laclau 2005a: 163)。ラクラウの代表は、所与の利益やアイデンティティをきちんと伝達する行為ではなく、代表する者とされる者との間で、それらがまさに形成される行為である (Howarth 2008: 182)。

ラクラウはポピュリズムにおける代表を、特殊性が普遍性へと接続するヘゲモニー闘争の実践として理解している。

ポピュリズムの輪郭を考える (鶴岡)

こうしたポピュリズム理解において、政治的に代表されるべき「人民の意志」(民意)はあきらかに後付けの装飾品に留まる。それはあくまでポピュリズム的な代表関係を成立させるような、代表する者と代表される者を連結するメディアの呼称であり、公的な制度的決定や特定の要求などを形容するものではない。ラクラウによれば、「政治的代表的の古典的理論(たとえばシュムベーター、ピトキン、ロールズ、ハーバーマースー引用者)の主たる困難さは、そのほとんどが『人民』の意志を代表より以前に構成された何かとして理解する点である」(Laclau 2005a: 193-4)。民意があるかないか、あるいはそれに適っているかどうかという問いは、「本質的に代表的な内部構造」を有しているポピュリズムの内部では発生しない。こうしてポピュリズム的な代表への支持の量が、そのまま民意の大きさを示すことになる。この民意の存在論をさらに考察するためには、代表する側にいるポピュリストについての分析が必要となる。次節では、人民の構成を理論化したラクラウのポピュリズムの論理に、ポピュリストの代表する契機が実質的に議論されていない点に注目したい。

#### 4 ポピュリストを超えて?

本節は、ポピュリズムの理論研究ではポピュリストについての考察が少ないという点を反省的に意識しながら、まさにこの点に、ポピュリズムの普遍性に対する領域的な制限が内在していることを探究する。これまでの議論によれば、ポピュリズムはそのフロンティアを収縮させながら、特殊な要求を節合することで持続してきた。それでは、このようなポピュリズムには純粋な外部は存在しないのだろうか。ポピュリズムはもはや現代政治と同義的なものとして理解してよいのか。そうであるならば、ポピュリズムに対する嫌悪感をどのように説明したらよいのか。本節では、

こうした残された疑問について、ラクラウの議論を批判的に考察することで応答したい。

まずラクラウにおけるポピュリストの位置づけを考える。すでに確認したように、空虚なシニフィアンの周囲に特殊性が節合されることによって人民が作られる (Laclau 2005a: 171)。このポピュリズムの論理において、たしかにポピュリストへの言及は少ない。しかし、本論考では、それを理論上の欠陥としてではなく、不必要さとして解釈している。つまり、ラクラウ理論では、ポピュリストは空虚なシニフィアンのひとつであり、その周りに構成されてゆく人民のアイデンティティと整合的に理解されている。ラクラウによれば、等価的に結びついたヘテロ的な要素の集合体が「単独性」(singularity)を必要とし、それが特定のリーダーの名前を招き入れることになる。そのため、この特定の個人への象徴的な結合は、人民の形成に特有のものである (Laclau 2005a: 100, e.g. Laclau 2005b: 40)。この場合、代表する者は個別の利益をありのままに反映するのではなく、むしろそれらをより普遍的な言説につなげるという象徴的な役割を果たしている (ラクラウ 2002: 281, e.g. Panizza 2005: 19)。ポピュリストは、空虚さの次元を特定の表象で充当するのではなく、自らもまた空虚で非決定的なものであり、人民との共振関係を維持する。ポピュリストは代表する側にありながら、たんに要求を集約的に反映するのではなく、代表される者との相互構築的な代表関係によってもたらされる。そのかぎりでは、代表する者とされる者との区別はなく、ポピュリストは人民を単独的なものとして呼ぶための別称にすぎない。「ポピュリストが人民を代表する」という形式は、あくまでポピュリズムの言説的な性質であり、それはラクラウが代表の契機として指摘する、人民を構成する過程とは異なっている。

ポピュリズムの輪郭について考察する本論考が注目するのは、ポピュリズム的な代表関係はいつ成立したのか——不在が存在となる瞬間——という問題である。それは、言い換えれば、ポピュリストに収斂される単独性にどのような外部があるのかという疑問である。このような問題意識は、これまで参照してきたラクラウの理論に、ポピュリス



ムの始まりを説明する言葉が不足しているという認識によって支えられている。たしかに、代表関係をヘゲモニーの過程として理解する場合、ポピュリズムの名づけには純粹な起源があるわけではない（と同時に終焉もない）（Thomassen 2005: 294-5）。しかしながら、本論者が問いたいのは、敵対性の一方の極として人民のアイデンティティ形成において機能する構成的外部ではなく、ポピュリズム的な代表関係そのものの構成的外部についてである。

ラクラウにおける構成的外部は人民に対する敵対的な他者の存在である。他者は人民の内的なフロンティアの外側に放逐されるべき存在である。しかし、そのような他者はまさに排除されることで、人民のアイデンティティが構築されるのに手を貸し、同時に、その作業が完全に終了することを妨げている。なぜなら排除すべき他者が存在するかぎり、内部のアイデンティティは脅威にさらされつつづけるからである（Panizza 2005: 17）。ムフの言葉をかりれば、<sup>(a)</sup>構成的外部は内部（私たち）の根源的な決定不可能性を暴露するという機能をはたしている（Mouffe 2000: 12-3）。本論考はこうした人民の構成的外部についての議論を受け入れた上で、それがポピュリズム的な代表関係における決定不可能性をもあらわにすると考えている。以下ではラクラウへの反論を参照しながら、この点をより明確にしたい。

第二節で議論してきたように、ラクラウのポピュリズムはあくまで「言説」であり、いかなる運動にも部分的に反映される。そのため、ラクラウにとっては、問題は人民の象徴的な形成における抽象化の過程であり、特定のポピュリズム現象そのものの評価は直接的な論点とはならない。そのかぎりにおいて、特殊な諸要求は等価的に節合する。さらによれば、ポピュリズムにおける存在論的な外部と存在的な外部を混同してはならないだろう。こうしたラクラウのポピュリズム論における留保を受け入れた上で、本論考は批判の照準をポピュリズムの言説的性質ではなく、代表関係における決定不可能性に定めた<sup>(b)</sup>。

私見によれば、ポピュリズム的な代表関係もまた、純粹な起源に遡及することができず、決定不可能なものに留ま

るのではないだろうか。あるいは、ポピュリズムの論理の単独的な普遍性は、それ自体が外部との関係において特殊なものとしての性質を帯びていてではないか。その理由として、第一に、特殊な要求の集合をポピュリズムとして領域化する際に、まず何がそれに包摂されるのかを決定する必要がある。すなわち、ポピュリズムにおいて構成されるべき人民の萌芽的な要素が、基礎的な要求として示されていなければならない。第二に、ポピュリストと人民が同時に登場し、等価的に接続されるためには、何らかの手續きを経てポピュリストとなるべき人間が、その代表関係が成立する以前に準備されていなければならない。こうしたポピュリズムの輪郭それ自体に関する原初的な設定は、ポピュリズム的な代表関係に先行する。なぜなら、ポピュリストになるべき人間はまだポピュリストではなく、そのかぎりにおいて代表されるべき人民は主体化されていないからである。あるポピュリズム的な代表関係が成立するためには、不在を存在に変えるような外的な権力作用による設定が必要となる。そして、こうしたポピュリズムの論理に包摂されない外部の存在が、ポピュリズム的な代表関係を単独性として認識することを許している。

本論考が提起する問題を現実政治に即して述べるならば、ポピュリズムが発生する以前に、社会的文脈に組み込まれた具体的な代表する者（になろうとする者）がまず存在しているということである。ポピュリズムでは人民とポピュリストはあくまで同時に構築されてゆくのであり、人民はポピュリストを事前に指名することはできない。つまり、ポピュリスト（になる人たち）を提供する単位および社会的文脈に対して人民が依存的であり、こうした根源的な構成的外部の存在を前にしてポピュリズムは常に不完全な言説である。<sup>10</sup> 所与とされたポピュリストの存在はポピュリズム的な代表関係の輪郭をあらかじめ設定するとともに、それが本質的に特殊なものにすぎないことを明示する。そして、ポピュリストと等価的に接続する人民は、たとえその構成において普遍的であったとしても、その接続が成立するかぎりでの特殊性を埋め込まれている。本質的に空虚な人民の構成を手助けした脱構築の試みは、いまやそれが

ポピュリストと人民を継ぎ目なく接続する代表をも、決定不可能なものとして明るみに出すはずである。

ラクラウの形式主義的理論を継承する研究者たちであっても、この論点を部分的に言及している。デイヴィッド・ホワースによれば、ポピュリズムにおいて、ヘテロ的な社会的要求を特定のシニフィアンに接続する垂直的な関係性は、諸要求のあいだの水平的なつながりの連鎖によって支えられている。しかしながら、ラクラウのポピュリズム論は、ポピュリストと人民の垂直的な接続が、水平的なつながりを抑圧する可能性を無視している (Howarth 2008: 20)。ラクラウのポピュリズム論は「理論」というよりも概念や論理の「文法」と呼ぶべきものであり、社会的な状況や過程を現象と区別していない (Howarth 2008: 185)。またスタヴラカキスは、ラクラウの形式主義的なアプローチにおいて政治と同義まで高められたポピュリズムでは、あらゆる政治言説が「人民」に飲み込まれ、政治分析の道具としてのポピュリズムのもつ意味が失われかねないと指摘する。そのため、スタヴラカキスは、存在論的(形式主義的)なレベルと存在的なレベルを仲介するものとしてポピュリズム概念を再解釈し、人民の「構造上の位置」を考察する意義は失われていないと主張する (Stavrakakis 2004: 263)。換言すれば、政治を「人民∥ポピュリスト」の生成のみに一元化するのではなく、その代表関係の外側にある政治にも着目すべきと要求するのである。

これらの批判から導かれる点は、「人民∥ポピュリスト」の代表関係そのものをもたらずような、(代表性の次元における)もつとも原初的な排除は、ポピュリズム的な敵対性と区別されるということである。人民のヘテロ的な構成とポピュリストの代表は異なる。ウルス・ステーリの適切な表現を用いれば、ポピュリズムに輪郭を授けるこの原初的な排除こそ脱構築の対象であり、そのかぎりにおいて——敵対的な言説に特殊性を与えるような——「敵対的な節合の可能性についての歴史的な条件」が明らかにされる必要がある (Stehli 2004: 238-9)。こうしたポピュリズムの根源的な外部を指摘する声に対して、ラクラウの応答はそれを事実上受け入れるものである。彼は、自らがかつて

「制限」の観念と敵対的なフロンティアを同一視していたことを認め、敵対性がすでに言説の形式に埋め込まれているとともに、敵対性が根源的な排除と同じではないとする。その上で、構成的外部と敵対性を区別することに同意する (Laclau 2004: 318-20)。つまり、構成的外部は、敵対性に立脚した人民アイデンティティの形成のみに内在したものではなく、それが不在の次元でポピュリズムに輪郭そのものを与えることになる。<sup>(1)</sup> こうした区別を取り入れた、ラクラウによる新たなポピュリズムについての理論分析が待たれる。

## 5 まとめにかえて——ポピュリズムの時間

本論考は、何がポピュリズムかという無意識の判断を揺るがす問題として、その輪郭を考えてきた。ポピュリズム的な代表関係を成立させる原初的な排除は、ポピュリズムに輪郭を授ける。この不在が存在となる瞬間を、スタヴラカキスの表現を用いれば、「人民の構造上の位置」として分析する意義については、今後ますます高まってゆくだろう。こうした分析を蓄積する上で、ポピュリストと人民とをつなぐ自己制限的なメディアとして民意を理解する必要がある。

ポピュリズムに普遍性と特殊性の相互依存的な関係を見出すことができる。ラクラウが精力的に議論してきたように、たしかに人民の構築としてのポピュリズムは、特殊性を普遍性へと節合することによって成立していた。ポピュリズムに本質や固有の主張があるわけではない。それは、人民ではない対象との対比において、「人民」を生成する目的のみに資する言説が集積したイデオロギーである。そのためポピュリズムは、他のより体系的ないかなるイデオロギーとも共生できる性質を有している (Stanley 2008: 99)。

他方で、ポピュリズム的な代表関係は、それに原初的に輪郭を授けるような、ポピュリズムの内的な敵対性には還元できない構造的外部に依拠している。ポピュリズムは始まりを与えてくれるような外部を必要とし、その代表関係を維持できるかぎり、どのような政治単位とも接続する。ポピュリズムの理論分析のひとつの結論は、ポピュリズムはナショナルリズムと等価交換される運動ではないということである。ポピュリズムは言説的な次元における代表関係の形式であり、この意味においてポピュリズムの時間は、選挙や政策などの特定の状況を含むことできる。あるいは、既存や新設をとわず、特定の政党をポピュリスト政党へと意味づけることが可能である。つまり、新たな普遍性の成立であるポピュリズム自体が、ひとつの特殊性である事実から逃れることができない。こうしたポピュリズムへの視座は、現代日本政治を理解するために必要な、基礎的な文法のひとつとして数えることができる。

ポピュリズムに対する民意の歪曲という常識的な批判あるいは解釈は、妥当性と不毛性を同時に示すことになるだろう。一方で、ポピュリズムが何かしらの恣意性を有している点で批判は妥当するとともに、他方で、ポピュリズムがそもそも民意をメディアとして組み込んでいるという理論的前提を前にして、こうした批判は威力を失う。民意にどの程度従っているかどうかという基準は、こうした問題を立てた時点でポピュリズムと同じ言説を共有してしまっており、ポピュリズムそのものに対して効力がない。ポピュリズムにおいて、民意はポピュリストの存在に現われているのである。また、ほんとうの民意を追求することが主要な政治目標に設定されるかぎり、ポピュリズムが乱立するような状況が発生するかもしれない。その場合、反ポピュリズムという目的が空虚なシニフィアンとなって別のポピュリズムを構成することになるだろう。たとえば、二〇一一年末に選出された橋下徹大阪市長は選挙後の記者会見で、一貫して自らへの支持および得票を「民意」として理解している。<sup>(16)</sup> こうした民意の使用法は、本論者が論じた現代ポピュリズムの形式に特有である。仮に橋下氏が選挙で敗れたとしても、それが民意の表出という説明がなされる

のであれば、ポピュリズムから政治の形式が自由になったといえるわけではない。実際、橋下氏に対抗する陣営も、彼を「独裁」と表現した空虚なシニフィアンによって多面的な運動や要求を節合するかぎり、ポピュリズムの形式を有していたといえる。

ポピュリズムを批判するためには、ポピュリズム的な代表形式の、そしてポピュリストと人民をつなぐ民意の、決定不可能性に目を向けなければならないだろう——たとえそれが私たちに痛みを与えるものであったとしても。

※本論考は、二〇一二年度日本選挙学会研究大会分科会「地方選挙とポピュリズム」において発表された報告が元になっている。砂原庸介、木幸元、松谷満、待野聡史の各氏から有益なコメントを頂戴した。ここに記して謝意を表したい。

#### 参考文献

- Abts, Koen, and Stefan Rummens, 2007, 'Populism versus Democracy', *Political Studies*, 55-2, 405-421.
- Ankersmit, F. R., 2002, *Political Representation*. Stanford: Stanford University Press.
- Arditi, Benjamin, 2004, 'Populism as a Spectre of Democracy: A Response to Canovan', *Political Studies*, 52, 135-143.
- Canovan, Margaret, 1982, 'Two Strategies for the Study of Populism', *Political Studies*, 30, 544-552.
- , 2005, *The People*. Cambridge: Polity Press.
- Crichley, Simon, and Oliver Marchart, eds., 2004, *Laclau: a Critical Reader*. London: Routledge.
- Fraser, Nancy, 2009, *Scales of Justice: Remapping Political Space in a Globalizing World*. New York: Columbia University Press.
- Howarth, David, 2008, 'Ethos, Agonism and Populism: William Connolly and the Case for Radical Democracy', *The British Journal of Politics and International Relations*, 10, 171-193.
- Laclau, Ernesto, 1977, *Politics and Ideology in Marxist Theory: Capitalism - Fascism - Populism*. London: NLB (ホルネスト・ラックラウ)。一九八五「資本主義・ファシズム・ポピュリズム——マルクス主義理論における政治とイデオロギー」横越英一監訳・大阪経

資法科大学法学研究所訳『石橋書房』。

- \_\_\_\_\_. 1996, *Emancipation (s)*, London: Verso.
- \_\_\_\_\_. 2004, 'Glimpsing the future', in Crichtley et al. 2004.
- \_\_\_\_\_. 2005a, *On Populist Reason*, London: Verso.
- \_\_\_\_\_. 2005b, 'Populism: What's in a Name?', in Panizza 2005.
- \_\_\_\_\_. 2005a, 'Why Constructing a People IS the Main Task of Radical Politics', *Critical Inquiry*, 32-4: 646-680.
- \_\_\_\_\_. 2006b, 'Ideology and post-Marxism', *Journal of Political Ideologies*, 11-2: 103-114.
- ホルネスタ・ラングバウ 2002『権威 歴史 政治』(シヤンタル・ヌーロー、ホルネスタ・ラングバウ、ヌラウカイ・ジシヤン、『偶発性・ヘゲモニー・権威性』竹村田十・村山敏勝訳、青土社)。
- 林淑分, 2005, 「人民」做主の「民粹主義」民主與人民「政治與社會哲學評論」第二期: 一四一—一八一。
- Meny, Yves, and YvesSurel eds., 2002, *Democracies and the Populist Challenge*, London: Palgrave.
- Mouffe, Chantal, 2000, *The Democratic Paradox*, London: Verso.
- シヤンタル・ヌフ 11001『「強權政治」のトピックと民主政治』(シヤンタル・ヌフ編『強權政治とトピックマティスム』青木隆雄訳、法政大学出版局)。
- Mouffe, Chantal, 2005, 'The "End of Politics" and the Challenge of Right-wing Populism', in Panizza 2005.
- 大橋英夫 110011『日本憲法ユリストラと政治の期待と幻滅』中公新書。
- Panizza, Francesco, ed., 2005, *Populism and the Mirror of Democracy*, London: Verso.
- Phillips, Anne, 1995, *The Politics of Presence*, Oxford: Oxford University Press.
- Rummens, Stefan, 2009, 'Democracy as a Non-Hegemonic Struggle? Disambiguating Chantal Mouffe's Agonistic Model of Politics', *Constellations* 16-3: 377-391.
- Südhöf, Urs, 2004, 'Competing Figures of the Limit: Dispersion, Transgression, Antagonism, and Indifference', in Crichtley et al. 2004.
- Stanley, Ben, 2008, 'The Thin Ideology of Populism', *Journal of Political Ideologies* 13-1: 95-110.
- Stavrakakis, Yannis, 2004, 'Antinomies of Formalism: Laclau's Theory of Populism and the Lessons from Religious Populism in Greece', *Journal of Political Ideologies*, 19-3: 253-267.

- , 2005, 'Religion and Populism in Contemporary Greece', in Panizza 2005.
- Taggart, Paul, 2000, *Populism*. London: Open University Press.
- Thomassen, Lasse, 2005, 'Antagonism, Hegemony and Ideology After Heterogeneity', *Journal of Political Ideologies*, 10-3: 289-309.
- , 2007, 'Beyond Representation?', *Parliamentary Affairs*, 60-1.
- Forling, Jacob, 1999, *New Theories of Discourse: Laclau, Mouffe and Žižek*. London: Blackwell.
- Urbinau, Nadia, 2006, *Representative Democracy: Principles & Genealogy*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Vieira, Mónica Brito, and David Ranciman, 2008, *Representation*. Cambridge: Polity Press.
- 田中敏一 二〇一一年「ネオポピュリズムを考えるー民主主義への再入門」NHK トクメン。
- Žižek, Slavoj, 2006, 'Against the Populist Temptation', *Critical Inquiry*, 32-1: 551-574.

- (1) カノヴァンのポピュリズム理論については Ardit 2004 参照。
- (2) 民主主義とポピュリズムの相違を強調する主張は、政治権力の生成における空虚な場の持続に民主主義の特徴を見出すクロード・ルフォールの議論をしばしば引用する (Rummen 2009)。この立場によれば、ポピュリズムはその空虚な場を特定の表象によって埋めてしまうイデオロギーである。カノヴァンもまた、この空虚な場を埋める存在としてのポピュリストに言及している (Canovan 2005: 90)。この論点はあくからかにルフォールの解釈に依存する問題であり、本論考では議論の余裕はないものの、後述するラクラウの人民の主体化理論はルフォールの概念とのちがいを主張する。ラクラウにとって空虚さとは「アイデンティティの種類であって構造的な場所ではない」(Laclau 2005a: 166)。そのため、たとえ空虚な場を埋める存在があったとしても、そのユニフィアンの空虚さがなくなるわけではない (Laclau 2006a: 675)。スラヴォイ・ジジェクによるラクラウが二つの空虚さを区別していないという批判 (Žižek 2006: 559) については、ラクラウはまさにそれがこれまで主張してきた点であると述べる。別の表現を用いれば、ラクラウにとってポピュリズムは民主主義をある特定の同質性によって固定化するものではない。
- (3) ラクラウ理論における「人民」の主体化に、二〇〇四年の台湾総統選で顕在化したポピュリズムの左派的な転換の理論的根拠をもとめる議論として林 2005 参照。
- (4) 空虚なユニフィアンについては Laclau 1996: Chap.3 参照。
- (5) シャンタル・ムフによれば、現代ヨーロッパ社会を席巻している右翼ポピュリズムは、コンセンサスの構築を目的とした支配的な



リベラリズム的な代表制民主主義に、相違を表現する闘争的な回路が不在であり、そのために政治的な情動が暴発して道徳的主張と結びついたことに起因する (Mouffe 2005: 69-71)。ムフが提唱する闘争的な政治空間における右翼ポピュリズムの軟化という方策に対して、ポピュリズムと民主主義を厳密に区別し、前者の排除をもとめる議論として Abs and Rummens 2007: 422 参照。

(6) タッグアートもまたポピュリズムとナショナリズムの違いを強調する。ポピュリズムがナショナリズムと合致するのはあくまで後者がハートランドの価値を示す状況に限られ、それは前者にとって派生的な事象に過ぎない (Taggart 2000: 96-7)。

(7) ラクラウによれば、代表することと代表されることをめぐる原初的なズレは、代表を可能にすると同時に不可能にするものである (Laclau 1996: 98, e.g. Thomassen 2007: 123)。代表する者と代表される者の構成的な距離がなければ代表は成立しないが、その距離こそが代表される者が完全に代表されてしまうことを阻害している。

(8) ムフはデリダの脱構築のプロジェクトとヘゲモニー理論は結びついているとする。なぜなら、脱構築が決定不可能性を示すことで社会的な偶然性が表面化するとともに、その決定不可能な領域で決定するためにヘゲモニー理論が必要になるからである (ムフ 2002: 4)。決定不可能性とヘゲモニー理論の関係については Toffing 1999: 62-9 参照。

(9) ジジエクは、ラクラウによるポピュリズム概念の解析を基本的に承認しつつも、それが解放の政治を刷新するための基盤としては使えないことを明確に宣言している (Zizek 2006: 567)。なぜなら、ポピュリズムは既存の政治過程に対する拒否のみを構成要素とするような、否定的な現象としてしか存在しえないからである。このような基本的な立脚して、ジジエクはポピュリズムの二つの問題点を指摘する。第一に、たしかにポピュリズムは形式主義的な政治的論理であるものの、内的な社会的敵対性を統一された人民と外的な敵という形式を固定化し、外部を排除することによって成立している。そして、第二に、ポピュリズムの最小単位である個別の要求については、それぞれが演技の要素を含む可能性があり、その深刻さの度合いについては相当程度に議論の余地がある (Zizek 2006: 555-6)。こうしたジジエクの批判は、むしろポピュリズム現象そのものへの批判であり、ラクラウのポピュリズムの言説的な構成に有効であるかは議論の余地がある。

(10) タッグアートやパニッツァが指摘するように、ポピュリズムは政治過程における代表の契機を否定するものではない。ポピュリズムはあくまで既存の制度や形式を批判するのみにとどまり、それら批判を節合して、自らも政党制や代表制にしたがい、新たな代表性の構築を目的としている (Taggart 2000: 86-9, Panizza 2005: 11)。ポピュリズムには代表制民主主義への抵抗と依存が同時に必要であり、この代表へのあいまいな態度がそれが短命であることの理由となっ (Taggart 2000: 99, 110, e.g. Meny and Surel 2002: 18)。

(11) ラクラウは近著で人民の構成に対するふたつの制限として、社会的な敵対性がそれぞれ有している文脈と、その動員に対する反動

の存在をあげてくる (Laclau 2006b: 112-3)。この指摘はポピュリズム理論と現実社会の接点に関するものであり、ポピュリズムの存在を問うる制限はない。

(12) <http://www.city.osaka.lg.jp/seisakukikakushitsu/page/0000159324.html>